

稲垣良典先生のお仕事を振り返る

片山, 寛
元西南学院大学神学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/7159241>

出版情報 : 哲学論文集. 59, pp.83-91, 2023-09-30. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai
バージョン :
権利関係 :

稲垣良典先生のお仕事を振り返る

片山 寛

稲垣良典先生が（2022年）1月15日に亡くなられたことは、私にとっては世界に羅針盤が失われたような衝撃であった。私は今でもそれを埋めることができないでいる。私は長年、先生のお仕事をお手伝いするという仕方で、自分自身の研究生活を送ってきた。自分ひとりのテーマの仕事をするときにも、このテーマについて先生ならどう考えたくなるだろうか、ということが私の中では常にあって、言うなれば先生との対話という仕方で私は仕事をしてきたのだと思う。その先生が天に召されて、私は途方に暮れている。これは、稲垣先生に強く依存してきた私だから特にそうなのかもしれないが、大きな意味ではすべての人にとっても、先生の死は、世界の基準（羅針盤）がひとつ失われた、ということを意味するのではないだろうか。そしてそれは、先生のお仕事そのものとも関わっているのではないだろうか。そう思われてならない。つまり、よき教養、そしてよき哲学というものは、そのような基準となるべき人間を作り上げると思われるのである。

稲垣先生は、私のみならず、永嶋先生、東谷先生にとっても、また多くの人々にとっても、羅針盤のような存在であったと思うのです。中世の文献はそのような存在を *auctoritas*（権威）と呼びました。たとえばトマス・アクイナスは、アウグスティヌスや

アリストテレスを始めとする古代の神学者・哲学者たちを *authoritas* と呼びました。権威だからといって、間違いをいっさいしないわけではない。その点では神や神の言葉である聖書とは区別されます。しかし彼らが与えた方向には間違いがない。信頼するに足る。そのような存在が *authoritas* であり、私にとつてのみならず多くの人々にとつて、稲垣先生は *authoritas* だったので。

なぜ私たちが持つべき基準は、ひとつの概念や理念、公式や法則のようなものではなく、一人の人間なのでしょうか。これはそれこそ稲垣先生に聞いてみたい問題なのですが、ここではその問題はしばらく控えます。

稲垣先生のお仕事は、特に後半生（1975年以降）、トマス・アクイナスの『神学大全』を毎朝宮々と翻訳することをひとつの柱にしていたのだが（この偉業は2012年に完成した）、それと結びついた先生ご自身の哲学的思索がそれに劣らず重要であった。多くの著作をなさった先生だが、中でも哲学的な意味で重要なのは、次の三つであったと思う。『習慣の哲学』（1981年）、『抽象と直観』（1990年）、そして『神学的言語の研究』（2000年、いずれも創文社）である。

稲垣先生は、世間的には「トマス・アクイナスの翻訳者・研究者」として著名でした。しかし2022年の『中世思想研究』に、中世哲学会会長の上枝美典先生が書いておられるように、先生は「トマス哲学の紹介者」という枠に収まる人ではありませんでした。トマスの思想は、稲垣先生ご自身の思想の中に取り入れられ、先生を通してより生き生きとより整合的な先生ご自身の哲学と形而上学を語っているのです。

先生の数々の御著作は、私がここに挙げた三つの著作よりもはるかに大規模で豊かであり、私は自分がそれを矮小化してしまうのではないかと怖れるのですが、確かに、最初に挙げた『習慣の哲学』以前の先生のお仕事は、「トマス・アクイナス研究」という枠にひとまず収まっていたということも言えるように思います。『習慣の哲学』は、トマスから出発しつつ、それを稲垣哲学の中で展開させた書物だと言えるのではないのでしょうか。トマス研究という形式を、先生は最後まで捨てることはなかったのですが、

トマスが稲垣先生を通して現代に向かって語りはじめるという、新しいあり方がこの『習慣の哲学』ではつきりしてきたと思えるのです。

『習慣の哲学』は、トマスが諸徳や学知などを *habitus*（習慣）という名で呼んでいたことに発している。*habitus* は、トマスの定義によると能力（可能態 *potentia*）と現実態（*actus*）の中間にあつて、私たちが通常、個人の能力だと考えている技術知や学知、あるいは個人の有する倫理徳などはすべて習慣である。ここでは私たちの通常の習慣概念を変更する必要がある。先生の言葉を引用すると、「ふつう習慣は同じような動作のくりかえしを通じて形成されることから、同じような動作の単なる反復が習慣の原因であるかのように信じこまれているが、それは誤りである」。「むしろ同じような動作の反復は、習慣が形成されるのに必要な準備にすぎず、また習慣が根を下ろすのを妨げる反対勢力にうちかつという役割を果たすものであつて、ほんとうの意味での習慣の原因は主体の内部に求めなければならぬ。じつさいに、習慣は人間のように開かれた本性——人間は人間であると同時に人間にならなければならないような存在である、との意味で——を持つものにおいてのみ形成されることができし、また欠くべからざるものでもある。したがつて、習慣形成の原動力は、人間を人間になることへと向かつて、つまりみずからの本性の実現へと向かつておし動かす原動力と同じものである。そうした力とは理性と意志であり、言いかえると自由の能力である。……こうして、習慣は行使された自由の軌跡であり、人間が自由な能力の行使を通じてみずから作りだす道である」（『道と自由』稲垣良典『恵みの時』8頁）。

『習慣の哲学』の「はしがき」の中で先生は、「研究の初期のころ行った発表のあとで、畏友黒田巨君（東京大学教授）は『君は素晴らしい鉱脈を掘りあてたようだ』と言ってくれた」ということを紹介しておられるのですが、黒田先生が習慣論を「素晴らしき鉱脈」だと言われたということを、私なりに解釈するならば、それは、「習慣」という概念が、認識論と倫理学と形而上学的全

体に関わる、そしてそれらを新しく方向づける可能性を持った概念だということだと思われるのであります。稲垣先生が向った道の先を見るならば、習慣は哲学と神学を結びつける、ということもできます。人間の自然本性の実現は、将来に向かって開かれたものであって、それは被造物としての人間の究極目的に関わってはじめて十全に規定されるものだからです。良き習慣の形成は、人間の存在論的ありようを決定するものであり、それは対神徳（信仰、希望、愛徳）とも結びつきつつ、この世界全体の意味をも予感させるものなのです。

しかし稲垣先生の偉大さは、習慣概念の重要性を発見したというには留まらず、それを自ら生きたというところにあつたと思つたのです。ずっと前、私は先生に、先生はなぜお忙しい中でカトリック教会に通われるのでしょうか、と尋ねたことがありました。先生はそれに対して、「冗談のように、「私は習慣の奴隷ですから」と答えられました。「神学大全」の翻訳もその一つなのですが、よき習慣というものを先生は守り続けられました。私たちはそれを見て、先生は何て意志の強い人なのだろうと考えるのですが、先生にあつては、それは何か意志とは別の、「よき習慣を守る喜び」というものではなかつたのだろうか、と私には思われるのです。

稲垣先生のご生涯は、まさにこの言葉を実践したものであつたと思う。良き習慣としての哲学の形成に向かつて、先生は日々努力を続けられた。そしてそのことは、先生を「諸徳を備えた人」にもしたのであつて、実際、先生に接した人間は誰でも、先生の人格において諸徳が実現しているのを感じないではいらなかつたのである。現代においては、「能力」という概念が知的能力に偏重しており、たとえば哲学の研究発表でも、発表者の情報処理能力を証明するだけという場合が少なくない。稲垣先生のお仕事は、それに対する疑問符でもあつた。習慣という概念が重要なのは、それが人間の理性的認識と倫理徳の両方を結びつけるものであり、しかもそれは人間本性の完成という、究極の完全性を常に目標に持っている概念だということである。

近代の、主観性を中心にしたデカルト以後の哲学に対して先生は常に批判的に対しておられました。そうした近代的な思想はどこから始まったのかを、先生はすでに早くから研究しておられたのですが、たとえば最初の論文集『トマス・アクィナス哲学の研究』（創文社1970年）は、「経験主義と形而上学」（第13章）とがトマスにおいては矛盾しないで調和しているが、近代以後は「経験主義」イコール「形而上学の排除」となってしまうことを論じておられます。こうした近代思想がどこに始まったのかを探求なさったのが、『抽象と直観』（創文社、1990年）という作品です。それは中世後期において形而上学的靈魂論が崩壊して、新しい認識理論が王座を占めるようになったという、稲垣先生以後、世界的にもしだいに認められるようになってきた考え方を明らかにしたものです。海外文献を自由に読みこなすことができない私には、稲垣先生の哲学の世界的な意味について、十分に読み解くことができないのですが、先生はこの世界的な思想潮流の少なくとも発信者のお一人であったと言えるのではないかと思います。

『抽象と直観』は、「中世後期認識理論の研究」という副題がつけられているが、そのとおり、中世後期に、特にオッカムのウイリアムによつて認識理論が大きく変化して、それが近世・近代の、基本的には直感を基礎にすえた認識理論の原因となったことを論証した著作である。トマスにおける「抽象」abstractioという名で呼ばれる形而上学的認識はそれによつて廃棄され、その結果、知性的靈魂がより究極的な普遍的な事物の認識へと開かれた構造を持つことも、以後は失われてしまった。

『抽象と直観』の主題は、『習慣の哲学』の延長線上にある。すなわち、なぜ中世後期から近代にかけて、認識論に偏重した哲学が支配的になってしまったのか、ということの解明がここでの主題である。そして先生がこれに対して与えた答は、「中世後期における形而上学的靈魂論の崩壊」という事態であったと思う。

このオッカムによる認識理論の変化は、よく言われる「オッカムの剃刀」という思考の節約原理によつてではなく、彼の

個体主義に起因する、というのが稲垣先生の発見である。「オッカムの存在論的立場としての個体主義は、裏からいえば、在の世界から（それによって個々の事物が相互に必然的に結びつき、何らかの秩序あるいは統一を形成するところの）本質あるいは本性をすべて排除することを意味する。『実在する』のは、つまり真の事物（res vera）は、何らかの仕方で類似してはいるが、いかなる意味（類的、種のあるいは類比的）でも『同じ』ではないところの個体のみである。そして、まさしく『実在する』のは個体のみであるがゆえに、感覚のみならず、知性によっても第一に直感的に認識されるのは個体である、というのがオッカムの認識理論の基本的立場であるといえよう」（『抽象と直観』94頁）。

この「個体主義」は、普遍的実在を前提する「形而上学」を崩壊させることになった。有名な「オッカムの剃刀」はその結果だけを呼ぶ名称である。「オッカム自身はこのような個体主義が（トマス派もふくめて）すべての人によって受け入れられている自明の真理であるかのように考えていた。しかし、実際にはそれはかれ以前のスコラ学者によって受容されていた形而上学的伝統にたいする根本的な批判をふくむものであり、それに代るべき存在論的立場として提示されたものであった。そしてわれわれがこんにち近代哲学と呼んでいるものは、このようなオッカムにおける存在論的立場の根本的な転回によって切りひらかれた展望のなかで成立した、ということができると思う」（同頁）。

形而上学の崩壊は、私たちの世界が「ゆとり」（余暇、教養）を失って「情報の飽食と精神の飢餓」（『恵みの時』184頁）の中で漂っていることの原因ともなっている。

「余暇」の問題は、ヨゼフ・ピーパー『余暇と祝祭』を1988年にお訳しになったことと関連して、今日において形而上学的認識を復興したいという、稲垣先生の願いと強く結びついています。「余暇」は、単なる労働からの解放では決してなく、それが人間の自由が十全に発揮される場所であり、中世の修道士たちが観想（contemplatio）の喜びを味わった場所であるのです。この余暇論と天使論（『天使論序説』（講談社1996年）とは、『抽象と直観』の主題の展開として、非常にすぐれたものだと思います。

稲垣先生は、九州大学文学部での20年間（1972-1992）、毎年前期の講義では「経験論哲学の研究」と題して、ロックやバークリ、ヒュームなどイギリス経験論哲学からカント、さらにウィリアム・ジェイムスやデューイ、パースなどの哲学における「経験」の概念を探求して講義され（その概観は、『講義・経験主義と経験』知泉書館2008年で知ることが出来る）、後期はそれを承ける形で、トマスを始めとする中世哲学の研究を講じられた。それゆえ、『抽象と直観』の後、先生はこれを展開・延長して、中世末期から近代にかけての人間精神のありようの変化を俯瞰する研究に着手する可能性があったと思う。しかし先生は結果としては、トマスにおける形而上学あるいは神学の研究を完成させる方向にすまされた。『神学的言語の研究』はその代表であるが、『人格の哲学』（ベルクソフ創文社2009年↓講談社学術文庫2022年）、『在るものと本質について』（トマスのDe enteの訳と解説・知泉書館2012年）、『トマス・アキナスの知恵』（知泉書館2015年）、『カトリック入門』（ちくま新書2016年）、『神とは何か』（講談社現代新書2019年）などの後期の作品はすべて、この方向での著作である。

稲垣先生が『抽象と直観』以後、形而上学と神学の内的関係を探求する方向に進まれたということは、私個人にとっても非常に大きな意味を持つことになりました。というのは、私はプロテスタント神学を学ぶ研究者として、両者（形而上学と神学）を対立的な学問だとする考え方の中に育ってきたからです。つまり、神学は上からの、神の啓示に基づくべきものであり、形而上学は下からの、人間の経験の意味を明らかにするべきものであるもので、両者がともに神を対象にしているとしても、その学問の方向は正反対ではないだろうか、そう思っていました。しかし稲垣先生の著作をひもとくうちに、私は、一見反対に見えるこの二つの学問が、実は内的に響き合っていること、その響き合いの中に「知恵」*sapientia*という、人間最高の叡智があるのではないかと、という稲垣先生の洞察に感化されました。その感化はまだまだ途上であって、私はまだ先生から学びたいことがたくさんありますので、これからも先生のご著書を通じて力及ばずながら学び続けたいと思います。

中世の神学や哲学を現代と比べると、その大きな特徴は、学問がその学者の修養や修道という「生き方」の問題と切り離せないということだと思ふ。現代思想においては、その両者が分離してしまっていることが多い。研究者は大学に勤める教員であることがほとんどで、いずれにしても修道士というわけではない。大学における業務のかたわらで、時間を捻出して書物をひもといているに過ぎないのである。とりわけ最近ではコンピュータの導入によって、書物を読むということの意味そのものが変化してきていると思ふ。修養のために、そして「徳の形成」（知的徳もそこには含まれる）のために書物を読んでいたというより、書物の中の情報をいかに能率よく処理するかが問われる時代なのである。

稲垣先生の存在は、そのような時代にあつて、人間が学問をするということの喜びと意味を教えてくれるものであつた。「真理はあなたがたを自由にする」（ヨハネ8章32節）という言葉は先生はお好きで、その著作の各所で引用していただけるのだが、先生を見ていると、確かにそれは本当だということを、私たちも実感することができたのである。

永嶋先生、東谷先生もおっしゃつたのですが、稲垣先生が九州大学を退官なさつたちょうどその頃に、私たちは宗像市日の里の稲垣先生のご自宅に集まつて、「トマス研究会」という会合を月に一度開いてきました。それは、トマス・アキノナスの著作を学ぶという目的を持った会合でありましたが、私のみならず10人ほどのそのメンバーが集まつた目的は、稲垣良典先生という「人」にお会いすることでもありました。先生のおられるところに、「哲学」という営みが存在している。私たちが自分の家に帰つて、日常の業務の中で忙しくしていると、その「哲学」はいつしか日々の仕事や、コンピュータ相手の高級なゲームのようなことになってしまふのですが、稲垣先生と語り合つてしていると、「哲学する喜び」を取り戻すことができる。トマス研究会は、私たちにとてもそのような貴重な機会だったので。

私たちはなぜ、「哲学」をするために、稲垣先生のような先達を必要としているのでしょうか。それは、哲学が根本的に（ソクラテス以来）「対話」的な学問であり、対話は「出会い」を必要としているからではないでしょうか。先生はある随筆のなかで、次

のように書いておられます。「われわれは出来事としての出会いから出発して行為としての出会いという考え方に到達した。ここでいう行為とは、『自分から出て行く』こと、自己超越の行為であり、それは人間が究極目的への正しい道を歩むときのみ可能であることを見た。しかし、ここでわれわれは一つの根本的な問いを問わなければならない——われわれはこの『自己超越』という自由な人間的行為を自分の力だけで為しうるのか?」「われわれの『自己超越』そして出会いを可能にしてくれるのは、最終的には恵みなのである。」(「永遠の出会いをめざして」『恵みの時』235頁)

私たちが稲垣良典先生に出会い、先生から教えを受けたことは、最終的には神からの恩寵・恵み (grace) の出来事であった。私はそう思うのです。

(元・西南学院大学神学部教授)